日蓮大聖人御書全集

うえののあまごぜんごへんじ

上野尼御前御返事

りようぜんさいかい こと

(靈山再会の事)

新版
1920
〜
1921

うえののあまごぜんごへんじ　りようぜんさいかい　こと

上野尼御前御返事（靈山再会の事）

こうあん　ねん　がつ　にち　さい　うえののあま

弘安4年（'81）1月13日　60歳　上野尼

せいじん　一　筒　提　じゆう　むしもちひやく　あめ　一　桶　にしよう

聖人ひとつつひさげ十か・十字百・飴ひとつおけ二升か・

こうじ　一　籠　くしがきじつ　串　栗　た　そうら　お

柑子ひとこ・串柿十くし、ならびにくり給ひ候了わんぬ。

はる　初　おんよろこ　はな　開　つき　満

春のはじめ、御喜び花のごとくひらけ、月のごとくみた

たも　由　承　お

せ給うべきよし、うけたまわり了わんぬ。

ごご　郎　殿　おんこと　思　出　そうら

そもそも、故五ろうどのの御事こそおもしろいであらう候

散　はな　咲　枯　草　萌

え。ちりし花もさかんとす、かれしくさもねぐみぬ、故五郎

どの　帰　たま　むじよう　はな

殿もいかでかかえらせ給わざるべき。あわれ、無常の花と

草 様

ひとまる

はな

許

離

くさとのようならば、人丸にはあらずとも花のもともはな

駒

くさ

許

去

れじ、いはうるこまにあらずとも草のもとをばよもさらじ。

きようもん

こ

敵

説

そうろう

謂

経文には、子をばかたきととかれて候。それもゆわれ

そうろう

ふくろう

もう

鳥

はは

食

はけい

もう

獣

候か。梟と申すとりは母をくらう。破鏡と申すけだもの

ちち

害

安

禄

ざん

もう

ひと

ししめい

もう

こ

は父をがいます。あんろく山と申せし人は史思明と申す子に

殺

よしとも

もう

兵

ためよし

もう

父

ころされぬ。義朝と申せしつわものは為義と申すちちを

殺

こ

敵

もう

きようもん

そうろう

ころす。子はかたきと申す経文、ゆわれて候。

こ

たから

もう

きようもん

みようしようごんのう

いちご

のち

また、子は財と申す経文あり。妙莊嚴王は、一期の後、

むけんたいじよう

もう

じごく

お

たも

じようぞう

もう

無間大城と申す地獄へ墮ちさせ給うべかりしが、浄蔵と申

たいし 救

だいじごく く

免

たも

せし太子にすくわれて、大地獄の苦をまぬかれさせ給うのみ

しやらじゆおうぶつ

もう

ほとけ

成

たも

しやうだいによ

もう

ならず、娑羅樹王仏と申す仏とならせ給う。青提女と申せ

によにん

けんどん

答

がきどう

お

そうら

し女人は、慳貪のとがによつて餓鬼道に墮ちて候いしが、

もくれん

もう

こ

助

がきどう

い

そうら

目連と申す子にたすけられて、餓鬼道を出で候いぬ。され

こ

たから

もう

きようもん

違

ば、子を財と申す経文たがうことなし。

こごころうどの

年

じゆうろくさい

こころ根

見

目

形

ひと

勝

故五郎殿は、とし十六歳。心ね、みめかたち、人にすぐ

そうら

うえ

おとこ

能

具

ばんにん

褒

そうら

れて候いし上、男ののうそなわりて、万人にほめられ候い

親

こころ

したが

みず

器

物

しのみならず、おやの心に随うこと、水のうつわものに

随

影

み

家

柱

したが、かげの身にしたがうがごとし。いえにてははしら

とたのみ、道にてはつえとおもいき。はこのたからもこの子

使 使 (しよじゆう)

われ死

担

のため、つかう所従もこれがため、「我しなば、になわれて

野辺 行

後 跡

思 置

深

のぼへゆきなん。のちのあと、おもいおくことなし」とふか

思

先 立

くおぼしめしたりしに、いやなくさきにたちぬれば、「いか

夢

幻

醒

んにや、いかにや。ゆめかまぼろしか。さめなん、さめな

思

醒

年

返

ん」とおもえどもさめずして、としもまたかえりぬ。いつと

待

覚

行 合

所

もう

置

まつべしともおぼえず。ゆきあうべきところだにも申しおき

羽

てん

上

船

たらば、はねなくとも天へものぼりなん、ふねなくとも

唐 土

渡

だいち

底

聞

もろこしへもわたりなん。大地のそこにありときかば、いか

でか地ちをもほら掘ざるべきとおぼ思しめすらん。

易々易々会会たもたもそうろうそうろうしゃかぶつしゃかぶつおんつかおんつか
やすやすとあわせ給うべきこと候。釈迦釈迦仏を御使御使いとし

て、りようぜん浄土へまいりあわせ給え。「もし法ほうを聞きくこ

とあらば、一りとして成仏じようぶつせざるひとことなけん」と申もうして、

大地だいちはささばは外ずるとも、日月にちがつは地ちに墮おち給うとも、しお潮は

満満干干よよみちひぬ世はありとも、花はなはなつ夏にならずとも、

南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようと申もうす女人にょにんの、おも思う子こにあわ会ずということ

はなしと説とかれて候そうろうぞ。いそぎ急いそぎつとめ勤させ給え、つ

とめたまさせ給え。恐々きようきようきんげん謹言た。

しょうがつじゅうさんにち

正月十三日

うえののあまごぜんごへんじ

上野尼御前御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押